

金融農業団体に35年間勤務後、埼玉福祉専門学校夜間部に3年間通い満60歳で卒業。現在、福祉法人 安誠園 本庄デイサービスセンター勤務。

還暦は3度目の成人式…福祉現場の最大のマンパワーへ

「てえ～ 若いね～」この言葉をかけられ私の60歳（還暦）からの第二の人生はスタートした。そこは、通所介護施設いわゆるデイサービスセンターである。介護福祉士として60歳代から100歳を超える利用者さんの入浴や排泄のお世話をはじめ、レクリエーション、リハビリのお手伝い、利用者さん宅までの送迎の運転手と働いている。利用者さんの中心的な年齢は80歳代から90歳代であり、この方々は丁度私の親の年齢である。「若いね～」と声かけられて元気なお年よりからパワーを貰って働いている毎日である。現に私の母親は88歳であり、施設長の計らいで認知症である要介護度4の母親を連れて出勤し、仕事が終わると母親を車に乗せて家に帰る、という風にさせて頂いている。母親は、食事は介助なく自分でできるが、排泄、衣類の着脱は不可能であり全介助を必要とする状況である。このような母親を常に横目で見ながら有難いことに前述の業務に携わっている。

このような第二の人生を歩むことになった経緯について触れてみたい。私は昭和46年に大学を出てすぐ金融を専門にする農業団体に就職し、電算部門を主に歩んで過ごした。今は当たり前前のATMに代表されようにオンラインシステム構築、運用等の後方部門に57歳まで関わってきた。組織のリストラの一環として57歳管理職定年制度なるものがあった。これは、57歳時で管理職である者は全てラインの長から退き、専門職としてかつての部下の下で60歳の定年まで雇用されるというものである。勿論、給与・賞与等の報酬は大幅な減であり、精神的にもつらいものが

あり得る。60歳までの雇用を望まず。57歳をもって退職という道もあり、この場合は退職金に若干の配慮がある。私は思慮した結果、後者を選択した。57歳までの人生を振り返る時間を取り、また60歳からの第二の人生スタートへの設計とその為に充電する時間を3年間としたわけである。おぼろげながら福祉の分野に何らかの形で関わってみたいと思っていたこともあり、まずは、福祉専門学校の間部に入學した。57歳の新入生の誕生である。入學式では父兄の席に案内される一幕もあり、今思うと懐かしい笑い話である。新入生は高校を卒業した18歳の若者から20歳代、30歳代、40歳代、そして50歳代は私一人であった。40数名の同級生であった。卒業時には39名となっていた。果たして、このような世代の者達と3年間、卒業までやっていけるのか若干の不安はあったが、全く新しいことに向かう好奇心と期待感の方が勝って気持ちは高揚していたように思える。若者のピュアな気持ちに触れ嬉しくもあり、頼もしくもあり、今の日本、捨てたものじゃないと改めて感じたりもした。また、社会人経験を経て入學した同級生もさまざまな経緯を経て入學していた。挫折からの再スタート、やりがい、生きがいを求める者、子育てをしつつ子供に学ぶ背中を見せようと頑張っている者、いずれは親の介護、家族の介護へ役立たせようと考えている者、社会貢献に繋げようと考えている者等、さまざまである。

私は第二の人生は福祉の現場に足を踏み入れ、住んでいる地域の人々との交流を深め、急速に高齢化する社会を目前にして、いずれ人にお世話になる前に自分がどこまでお世話をすることが出来るか試してみたいと考えている。それが生まれ育った地域への感謝であり貢献だと考えている。

また、趣味のゴルフや登山（日本百名山を登頂目標）は、もと

もと好きで取り組んでいたが、60歳を機に新たにチャレンジしたものがあある。それは全く弾けない「ピアノ」である。某音楽教室に入り練習して約1年になる。「続けなければなにかなる」もんだと実感している。音楽は好きでもあり、人生のビタミン剤でもある。天気の良い時に家の中で過ごす遊びが一つ加わった。

私の還暦の祝いは、家族には特別祝っては貰わなかったが専門学校と同級生と恩師の皆さんが、直前まで私には全く秘密にプランを考え祝ってくれた。人生最大の喜びであり、こんな幸せ者でいいのかと恐縮したりもした。今、私の書斎のまわりに目をやると学校で3年間学んだ教科書が本棚にびっしりと詰まっている。また、授業が終わると毎日行った小テスト、期末試験の問題、回答用紙、成績表、国家試験の問題、母の介護を通して学んだ認知症についての卒業論文等が箱に詰まっている。また、個性豊かな同級生との懐かしい写真もある。福祉国家といわれるスウェーデンを2学年の12月に修学研修で訪れた時のビデオテープ、写真の数々、懐かしいものばかりである。

今、志を同じくし学び巣立っていった若者達の福祉の現場は必ずしも恵まれていないのは周知の事実である。厳しい業務の内容とは調和の取れない報酬、志だけでは食べてはいけない現実もある。物づくりと違ってロボットによるオートメーション化は出来ない仕事である。団塊の世代の一員である私達が高齢化する時代が直前に迫っている。これを支えてくれるのは、私が一緒に学んだ若者達の世代である。この世代に何とか力になりたいと思い現在の仕事に取り組んでいる。私の給料は少なくとも若者の給料に反映されるなら、それが嬉しい。この一人の考えが福祉業界全体に広がり介護等の報酬改善に反映できないかと考える。つまり還

暦を迎え健康で体力に自信のある方は、まず、福祉の現場に携わってもらいたいと考える。いずれお世話になる前にお世話をする側を1年でもいいから携わることは出来ないだろうかと期待する。そうすることによって、福祉の現場の要員不足解消に貢献することが出来る。携わるまでの教育コスト、またインセンティブも必要であり、それは国や自治体の制度として位置づけてはと考える。例えば、携わった期間等によって、介護保険料の減額や介護を受ける立場となった時の利用サービスの拡大等である。

主役は還暦を迎えまだまだ元気な団塊の世代である。最大のマンパワーの存在である。頑張りましょう！！社会に貢献してきた介護を必要としている高齢者のため。それを支える若者のためにも。

以上